

●話題を追って[3]: 防災福祉研究教授の「防災登山」

一歩一歩の防災—「防災登山」で広域避難も視界に

スイス防災福祉から地域コミュニティの広域避難まで視界におさめる防災福祉研究のスペシャリスト・登山愛好家教授

本紙は2020年7月15日号(No. 238)で川村匡由(まさよし)武蔵野大学名誉教授・著による新刊(当時)『防災福祉先進国・スイス 災害列島・日本の歩むべき道』を紹介した。スイスは地球温暖化の影響で氷河融解、川の氾濫、雪崩などの水災害に加えて、バーゼルの街を全壊させた1356年大地震(M6.5)の再来を警戒しているという。

[>>旬報社:川村匡由『防災福祉先進国・スイス～災害列島・日本の歩むべき道』](#)

川村教授はスイス防災福祉研究のスペシャリストでもあるが、同氏を講師として、本年(2022年)9月25日出発(10月1日帰国)予定で「スイスに学ぶ『脱・限界集落』視察」旅行が企画されている。企画趣旨は「日本と同じ国土の約7割が山村のスイスでは過疎化を食い止めるべく農業保護、環境保全、有事・災害対策、インフラ持続化を図っている。その山村の実情を視察し、日本の山村など地方活性化、保健医療福祉や防災・減災を考える」というもの(群馬県の限界集落で1泊2日の事前研修会も)。

同ツアーに関心のある向きは本紙まで問合せのこと(概算旅行代金:42万5000円~47万8000円。最少催行人員7名以上。定員になり次第締切り)。



「スイスに学ぶ『脱・限界集落』視察」旅行チラシより。「日本と同じ国土の約7割が山村のスイスの過疎化対策から、日本の山村など地方活性化、保健医療福祉や防災・減災を考える視察旅行だ

(画像クリックで拡大表示)



川村教授提唱の「青空避難」になるテント生活(神戸市の六甲山にて/写真提供:川村匡由氏)

(画像クリックで拡大表示)

●山登り愛好教授がお薦めする「登山のノウハウを活かした青空避難」

川村教授の専門は社会保障・地域福祉・防災福祉だが、氏は自身が居住する都下・武蔵野市のコミュニティで地域サロン「ぷらっと」を主宰し、防災・福祉関連の活動も行っている。その川村教授は以前『いまからはじめる中高年の山歩き』(1996年、ミネルヴァ書房刊)を刊行するほどの登山愛好家でもあり、近年では「登山のノウハウを活かした青空避難」を提唱して地域で話題を呼んでいるという。

川村教授の「登山のノウハウを活かした青空避難」とは、具体的には、屋内でも数秒で組み立てられるナイロン製のドーム型ワンタッチテントやレトルト食品、携帯トイレ、段ボール箱を組み立てる自家製トイレ、ヘルメットやシュラフ(寝袋)を揃え、日ごろから外出する際、これらを収納したザックを背負って、体力づくりにも努めようというもの。

教授が薦める登山アイテムは、日帰り・山小屋泊・テント泊で分けて、さらに多種多彩に及ぶが、そのなかから自分の防災方針に合ったアイテムを選ぶことになる。

今日でこそ、キャンプ用品・アウトドア用品が防災兼用にできるということで、そのノウハウも各種情報があるが、教授の発想はさらに、まちなかから、地域、そして広域防災への広がりまで見通している点で、実にユニークだ。

日常的に歩くコースは日常の散歩コースでもいいが、毎回道を変え、周辺に路地や木密、電柱、電線、自販機、ブロック塀、アンダーパス、地下鉄、幹線道路、商店街、オフィスビル、堤防などの危険箇所をチェック(防災まち歩きの実践)。また、電車やバスに乗るとしても、車内では座席が空いていても座らないようにして体力をつける。

●まちなか防災から、地域防災、そして広域避難へと、視界は広がる

それだけではない、休日には家族とピクニックやハイキングがてら、コンビニやスーパー、公園、広場、農地、道の駅、奥多摩などを訪ねる。そして、いざというときは、そこにテントを張って青空避難ができるか、関係機関に確認しておくこと万全だという。

ちなみに川村教授は、武蔵野市の友好都市である岩手県遠野、山形県酒田、新潟県長岡、千葉県南房総、長野県安曇野、富山県南砺市、長野県川上村などの行政や知人、関係者ともコンタクトをとり、災害時に武蔵野市の市民がこれらの市町村に広域避難できるか、そして「困ったときはお互い様」の気持ちで互助が可能かなどを問い合わせもしている。いざというときの実践につなげるためにも、これらの市町や地元住民ともできるだけ交流し、いざというときの広域避難に備えている——

“教授に続け!”の実践はなかなかむずかしいが、川村教授、まさに山登りの一歩一歩のように、防災のゴールを見据えて登り続ける「防災登山先生」であることは確かだ。